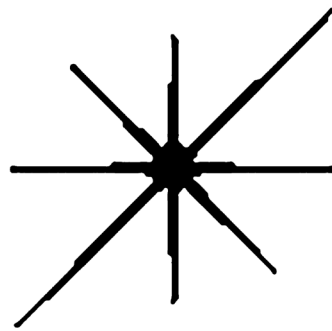


コメット通信 3

[特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

物語の余熱 (1)

——「ブラック・ノート」抄

中村邦生

0 「ブラック・ノート」について

黒表紙のノートの詰まった段ボール箱を久しぶりに開き、溜息がひとつもれた。

どこから整理を進めたらいいのか、好奇心と億劫な気分が交錯している。

写真家の笠間保（仮名）が南米のパタゴニアから消息を伝えてきて、およそ5カ月になるだろうか。世界最南端の町ウスアイアの消印の入った小包だったが、船便で日数がかかっているせいか、荷物はうっすら潮の香を含んでいる気がした。

送られてきたのは、36冊のノートブックだった。表紙にあるのは番号だけで、タイトルはついていない。モレスキンの黒い表紙の分厚いB5ノートであることは共通しているが、わざわざリング綴じに加工した1冊や、赤のガムテープで背を補修がしてあるものも混じっていた。

さらに2カ月後、沖縄の那覇から追加の荷物が送られてきたが、同じモレスキンの黒表紙のノートが4冊だった。

とりたてて親しい付き合いのあった人物というわけではない。そもそも私宛に荷物が送られてきた理由も判然とせず、気色悪い気分すらあって、いったんは2箱とも梱包をほどいたが、手紙らしいものも見当たらないので、しばらく放置してきた。いずれも半透明のビニールテープでぐるぐる巻きの念入りな荷造りがしてあり、それがむしろ雑に見えて、廃物の風体だったせい大きい。さらに最初のアルゼンチンからの小包が、新型コロナウイルスの蔓延で引受停止になっているはずなのに、なぜか届いたという不可解な事情もあった。船便の緩く、のんきな対応も微笑ましいと言えないこともないが、しばらく放置して滅菌を待つ気分が働いていた。

日数がたち、古雑誌を片付けていると、奥のひっそり置きっぱなしのダンボール箱の処理が気になりだした。ウスアイアの箱からおおまかに目を通すと、創作ノートであることが判り、1冊目の表紙の裏に手紙も挟まれていた。Hotel Albatros と印字のある便箋8枚にボールペンで記してある。

「こちらは夏です、といっても毎日うんざりするほど寒風が吹き続けていますけど。南極ツアーに出かけたいと思って待機しているのですが、何日もずっと気象条件が悪く、そろそろあきらめかけています。本当に行きたいのかどうかも、わからない気分になってきました。この先どこに向かうか、決めていませんが、日本には当分のあいだ戻らないでしょう。もっとも、その日、その時、どこにいるかは、自分でも予測できません。とにかく意地を張って、しかし何のための意地かあいまのまま、無理やり動き回っている感じがあります。パタゴニアに来たのも、サン＝テグジュベリとブルース・チャトウィンの本をお借りしたことがきっかけですが、それだって漠然としたものです。

ノートの束、どっさり送ってしまいました。さぞかし驚いたことでしょう。おじゃまになることは承知のうえです。他の誰にでもなく、たくさん本を貸してくださった大兄に、ぜひお読みいただきたいのです。面白がってくださるか、それとも『たわいない』と吐き捨てるか。どちらにせよ、ほどほどに穏当なとまどいがあるかもしれません。

なぜこんなものを書いたのか、立派な理由などまったくありません。振り返って考えると、大兄の書庫から自由に本をお借りできたことが大きな要因です。

もともと読書好きで、いつも何か読んでいないと活字への飢餓感がつのります。そうなるとう当たり次第に、薬の効能書きでもコンビニのおにぎりの食品添加物一覧でも、丹念に目を通そうとします。

父は埼玉のピーマン農家、母は中学校の国語教師でしたが、両親とも読書好きだったことも影響があるかもしれません。でも、私は大学では哲学、それも地味なイギリス思想を専攻したのですが、ほとんど授業には出ず、気ままな雑読乱読だけで研究書など無縁でした。結局、単位は取れず、5年いて退学しました。写真学校に入ったのは、その2年あとです。カルチャー教室の創作のクラスにも通いました。でも、こちらは悪例として紹介されるばかりでした。でも、自分でも妙なことだと思いののですが、けっこうそうした悪い見本になるのを楽しんでいました。

とにかく、本をあれこれ読むことほど、思いを掘り起こし、記憶を誘い出し、想像を刺激するといったような心の弾みを実感する体験はありません。そしてもっと深く読むにはどうしたらいいか。それは書こうと試みているときではないでしょうか。あまりうまく説明できないのですが、書くことは未知の何かを読んでいる感覚に近いのです。眠っていた記憶も、書こうとするとふいに浮かび上がったりして、読もうとします。書くという方法で初めて読めるものがある気さえします。

あえて言えば、読むことと書くことが、等価の気分として自分の中に住みつき、習性になったのでしょうか。さらに、この2つを続けるのに、旅こそふさわしいという事実を知ったのも、あの日に大兄にお会いしてからなのです。

ノートの雑文、読んでいただければ嬉しいですし、またどのように読んでいただいてもかまいません。ただ、すぐに気づかれるでしょうが、ここには今日の困難な状況への教訓となる話がたくさんあり、まさしく危機と不安と分断の時代の表徴として、あたかもアンテナ・ショップのように、時代の動向をキャッチするセンサーの役割をはたしている——などと、まさか言うはずもなければ、言えるはずもありません。こうした言い方を書きつけるだけで、ひどく居心地の悪い、何とも卑しい気分になってきます。どのように読んでもけっこうと申し上げましたし、また日頃の大兄のお考え次第とはいえ、こうした私の気持ちを頭の隅に留めておいていただければありがたいです。

とにかくどうあっても、目を通した後はご面倒をかけますが、速やかに廃棄処分をしてください。特別な秘密などないのですが、それでも処分をお願いします——と、カフカではあるまし、重々しく遺志を伝えることなどもしません。はっきり言って、どのように処理してほしいか、要望などまったくないのです。もちろん、廃棄していただいても一向にかまいません。何だかわけのわからないことを述べているようですね。文字通りお荷物になってしまい、申し訳なく思います。あれこれお手をかけますが、よろしく願い致します。では、どうか、お元氣でお過ごしください。長文になりました。妄言多謝。

笠間保拝]

ノートと同じく、細かく乱雑な字で、判読するのに苦勞する箇所も多々あった。那覇からの小包も点検したが、「追加のノートです」と記した紙片があるだけで、手紙らしきものはなかった。

ノートの内容は雑記帳と言ってよく、完成しているのか未完成のままなのか、にわかに判断のつかない小説のようなもの、身辺雑記、アフォリズムめいた断章、走り書きのメモが混在していた。これらの文章群を読むのは思いのほか面倒だが、まるで誘引物質でも放っているように、そわそわと落ち着きなく心動き、惹きつけられてしまった。最初のノートの冒頭に、次のような言葉が書きつけてあり、思わず笑いが漏れてしまったことが、誘いの発端となった。

「私は嘘つきやフェイカーが大嫌いだ。この連中は何かにつけてお気軽に嘘を繰り返すことによって、ときに厳かなほど尊く、丁寧に敬意をもって遇すべき〈フィクション＝虚構〉を愚弄しているからだ」

これら「ブラック・ノート」の文章群を未完とか出来の良し悪しとかに関係なく、作品として扱っていきたい。どのような掌編や断章でも、読んで何らかの感情を揺らし、思念の振動を促すものが、私にとっての作品である。

はたして笠間保とは何者なのか？ 実は、私自身よく判ってはいない。親のことも、哲学専攻で大学を中退したことも、手紙を読んでではじめて知った。最初の出会いは、7年前、京王井の頭線の浜田山駅近くの不動産屋だった。

彼は親の農地売却の遺産で買った利殖用マンションの管理委託の更新手続きをしている最中で、私は自宅にあふれた本を保管する賃貸物件の相談で店に立ち寄った。

たまたま近くに居合わせた笠間は、私の所蔵する本に興味を示し、小声で話しかけてきた。「すみません、私、世田谷の上北沢に住んでいる笠間と言いますが、少しお聞きしたいことがあるんですけど、いいですか？」

「ええ、けっこうですが、何か？」

「あなたが、一番大切にしているのは、どんな本でしょう」

と笠間は唐突に面接官のような口調で尋ねた。

「大切ですか？ いや、まあ、そのときどきで、変わりますけどね」と口ごもりながら答え、「強いて言えば、いつだっぴま読んでる本が、一番大切です」と付け加えた。

本当にそうだろうか。答えに怪しい気分が動いたが、いちいち正直に検討することもなかった。

すかさず笠間は「じゃ、いまは何を讀んでいるんですか」と聞いてきた。

「申し上げても、知らない本ですよ。『もう森へなんか行かない』という、私の書いた小説集ですから。必要があって、今朝から読んでいます」

「そうですか、本を書く方なんですね」と彼は短く応じた。

笠間は着古したこげ茶色の革ジャンパーを着ていて、話をしながら右手で襟元を直す癖があった。もみあげのあたりに白髪が目立つが、私よりも5、6歳若く、ちょうど還暦を過ぎたくらいの年齢に見えた。

「写真集は何かありますか？」

「ええ、それなりに。一番愛読している写真集は何か、お聞きになりたいんでしょう？」

「そうです。でも、写真集だから、読んでる本というわけじゃないですよ」

「いや、写真集だって、読むものだと思いますよ」

笠間は笑いながらうなずき、メモを取る用意をした。

「『小屋の情景』という写真集です。山形の農家の物置小屋とか、隠岐島の漁師小屋とか、浜松の楽器工場の煉瓦の小屋とか、中古バスを資材置場にした長野の小屋とか、あざやかなオレンジ色に塗りこんだスペインの鶏小屋とか……」

「いいですね、そういう本、大好きです。コナン・ドイルの『緋色の研究』って、ありますね。私は写真の仕事をしている者ですが、〈錆色の研究〉とタイトルだけ真似をして、錆ついたドラム缶とか、トタン塀とか、鉄錆の浮いた扉とか、錆色のテーマで写真を撮ったことがあるんです」

「で、写真集にまとめたとか？」

「いやいや、私の場合、そういうタイプの仕事とは違います。スーパーのチラシとか、飲食店のサンプル用の料理写真とか、映画のスチール写真とか、もっぱらそういったものを撮っています。で、ご相談があります」

笠間はいったん席をはずしていた不動産手続きの担当者呼び寄せた。

最初は途惑いの表情を浮かべていた若い社員は、事務的な態度を作り直し、笠間の指示に従った。

笠間は2LDのマンションの空室を、書庫として私に半額の家賃で貸す提案をしてきた。代わりに、蔵書を図書館のように利用させてほしいというのだ。貸出用のノートも備えるという細かい約束まで口にした。

こうした家主と店子の親密な関係が始まって、笠間との直接的な交流はほとんどなく、書庫で顔を合わせることもなかった。貸出ノートを覗くと、律義に貸出日、返却日を書いてあったが、1年もすると記載も気まぐれになった。貸したまま返ってこない本もあり、逆に返却記録がなくても、棚に戻っていることもあった。

笠間との蔵書の貸借契約は、当初からやや気詰まりなところがあったが、借りていった本と「ブラック・ノート」との間に密かな関係のある今となっては、好奇心がずきりと動く。読んだ本はオレンジ色の付箋を残していたので、見つけやすかった。貼り方に縦と横の区別があったが、その区別の法則性はよくわからない。

書庫の賃貸契約は4年ほど続いたが、ある日、不動産会社を通して打ち切りの連絡があった。当の3階建9世帯のマンションは老朽化のため取り壊しの計画である、と。退去の手続きと本の引っ越しを終えたときには、すでに笠間の所在はつかめなかった。不動産屋にも旧住所の記録しかなく、行方不明も同然だった。私の蔵書は神田川沿いのアパートに移動した。住いとは川をはさんだ真向かいの場所となり、使い勝手はよくなった。

消息が掴めない程度のもので、遺稿などと呼んではいけないのであろうが、なぜ笠間は形見のように何冊もの創作ノートを私に送ってきたのか。最初のノートの表紙裏に添えてあった書き付けに、短く理由らしきことが書いてはあったが、納得するほどのものではない。「ほどほどに穏当なとまどい」に何か意味が絡んでいるだろうか。

一瞥しただけで閉じてしまったダンボールの中を改めて覗いていくうちに、秘め事に触れるような後ろめたさと好奇心が入り混じって私に取り憑いた。「パンドラの箱」とまで言うのは、大袈裟だし、そもそも災禍の元が飛び散るわけでもないだろう。しかし、勝手気ままに送りつけてきた意図が何であれ、想像の触角を伸ばす剥き出しの好奇心に我ながら驚いた。それでも期待したほどの内容ではないと判断すれば、あっさり廃棄を決めるかもしれない。もはや箱を開けた以上、とりあえずこの遭遇を僥倖と思うことにした。

同時に、私にはとりたてて関心のなかった笠間保の生い立ちや私生活の様相を垣間見ることもあるだろう。その共鳴作用で私自身の未知の感情や眠っていた記憶が誘いだされる意想外の経験が待ち構えているかもしれない。

笠間保のノートブックに残された雑記を含めた「作品」の紹介を試みる。ただし、1冊目から順に追って調べていく研究調査を真似るような網羅的作業をするつもりはないし、その必要もないだろう。文献解題風に記すこともあれば、ごく簡単な紹介文、ただ引用だけを写し取ることもある。いずれにせよ、その日の気分のおもむくまま、私自身の関心に応じたものになるだろう。笠間保にとっては、不本意な試みかもしれないが、いわば「ブラック・ノート」の読書ノート化である。

ノートには日付がなく、表紙に(1)から(30)までの番号が入っていて、それ以降は記載がない。したがって、(31)から(36)は便宜的に私が番号を振った。各冊にはページ番号が入っているが、31冊目以降は書かないことが多く、これも私の方で書き入れた。沖縄から届いたノートは(1)から(4)とノンプルが付いているが、便宜上(37)から(40)と通し番号にした。当初の几帳面な小さな字も、こちらの4冊は走り書きに近く乱雑な筆記に変っている。内容面の変化はまだ判断がつかない。

導入文、全文引用または〈あらまし〉、そして〈寸感〉といった構成を主とするが、〈あらまし〉はなるべく書き手に憑依するようなスタイルで記した。その方が物語に〈余熱〉を感じられると思ったからだ。

1 アフォーリズム的な断章

(40冊目、最終ページ)

本を選ぶとき、しばしば「あとがき」を先に読んだりする習癖に似ているが、「ブラック・ノート」も、まず最終巻の最後のページを開いてみた。タイトルのないアフォーリズム風の文章が載っている。

〈作中人物もまた作品の外の物音に耳を澄ましているのだ。ある小説を読者が読み出すや否や、いやむしろ読むことによって初めて、登場人物は外部の音にめざめ、読者の声を聞きとれるようになるのである。読者の心中の声すら聞こえるときもあるぐらいだ。〉

出典は書いていないのだが、どこかの本からの引用のように思う。おぼろげな記憶ではあるが、小説ではなかっただろうか。先に述べたように、笠間は読んだ本の印象的な箇所にはオレンジ色の付箋を貼っている。見当をつけてその跡をたどったが、確認できなかった。私の思い違いだったかもしれない。

いずれにせよ、まず最終ページを覗くことを笠間が予期していたとすれば、どのような意図が働いていたのだろう。仮に何か企みがあったにしても、私が当人に伝えなければ意味がない。ましてや、読まずに廃棄する可能性だって想定できたはずだ。

もしかしたら、私がこのように「ブラック・ノート」を読み、その抄録を試みることを笠間は見通し、確信していたのだろうか。実際、その通りの成り行きになったのだが。

どこをどのように読むかまだ判らないが、登場人物が私の「心中の声」に耳を澄ましているとなると、いささか不気味で、文字通り心中は穏やかではない。しかし、笠間には申し訳ないが、私が興味を感じて取り上げる文章は、そうそう簡単に私の「心中の声」など聞き取れるはずはない類のものだと思う。だが、はたしてどうなのか。

2 破り捨てられた1枚

(1冊目 21ページ、裏22ページ)

新聞がポストにさしはさまれる音で目が覚めた。朝刊ではなく夕刊だ。「ブラック・ノート」を点検しているうちに徹夜となり、ランチを終えると昼近くになった。

新聞は政府による全国民に1人2枚ずつのマスクの配布の決定を伝えている。

数日前、届けられた新聞もアルコール液の噴霧をしなければならぬのではないかと疑ったが、そ

これまでの清潔幻想は、ほとんど錯乱に近いと思いとどまった。インフルエンザの流行期だって、そんなことは考えもしない。とは言いつつ、図書館によっては返却された本を2週間隔離するところもあるというから、警戒への意識は堂々巡りする。

いま、そうした用心への底なしの思いよりも、目覚めたのが夕方ではなく、朝なのだとしきりに信じたがる自分にうっすら狂いを感じる。

気を取り直して、軽く身体を動かした後、「ノート」に戻った。

1冊目は少し湿気があって、なぜかうっすらと潮の香がした。その21ページに破られた跡があり、中央の折り返し口に、捨てるつもりだったのかどうか判断がつかないが、2つ折りの紙片が挟んであった。

笠間は私と同じく独居生活だと推察しているのだが、ことによると孫でもいたのだろうか。子どもの作文を模した走り書きがあった。タイトルは付いていない。裏の22ページには吉野弘の詩「好餌」についての短文があった。まず表面の文から読んでみる。

となりの席のかみの毛の真っ白なおばあちゃんがね、ゴソゴソ買ひものぶくろの中をのぞくんだ。そのたびにひじが、ぼくのむねをつつつくのさ。ついてないや。でも、そのおばあちゃん、きゅうに席を立て、ドアの近くにいた背中がまったおばあちゃんに席をゆずりに行った。しまった、ぼくがゆずるべきだったんだ。もうすぐ5年生なんだから、それくらい気がついてよかった。ぼくはすぐに立って、席をあげた。2人はすわった。でもさ、まさか、かみの真っ白なおばあちゃん、心の中で、こんなふうな、いじわるなこと、言ってないよね。「なんだろね、さいきんの子どもは、あそこにおばあさんが立っているのに、どうどうとすわっている。さっきから、ひじでわきばらをついて、あいずをしているのに気がつきもしなかった。親のかおが見たいものだね」。ああ、それなら、すぐに見られるよ。ほら、おばあちゃんの反対となりの席で、ぐーすかぴーって、ねむっているのがパパだよ。ひじでつつついて、おこしてもいいよ。

最後に（ ）で「ここまでで、まあ、いいか。今日はおしまい」と笠間は付け加えている。続きがあるのかどうか確認してもいいのだが、ページから破ったのだから、書く気はなかったのだろう。子ども詩を模したとはいえ、この稚しさに自分で嫌気がさしたのかもしれない。裏面の吉野弘の「好餌」のコメントを見ると、このように記してある。

隣の座席の「黒胡麻をまぶしたような風貌」のお婆さんが、大きな袋を覗いて探しものをしていて、しつこく「私」の脇腹を突つつく。「私」は「災難」に会ったと思う。すると「黒胡麻婆さん」は席を立ち、ドアの近くにいた深々と腰の曲がったお婆さんに席をゆずりにいく。外の景色を見ている「黒胡麻婆さん」の閉じた口から「私」にこういう声が発せられた。「何の不思議もありはしないよ。私を非難することできりたっていたお前さんの目に私以外のものなど見えなかった筈さ」

一瞬、心が動きかけたけど、おやおや、これでいいのかなと思う。何が？「黒胡麻婆さん」を「老婦人」とでもすれば、こうした話の成り行きにはならないんじゃないか。「かすかに香しい匂いを身にまとっている着物姿の老婦人」となれば、どうだろう、もっと話はすすまなくなる。それだと「災難」に会ったとまで感じたかどうか。最初に蔑視の思い込みを前提にしないと、「黒胡麻婆さん」に与えた辛辣な心の声のインパクトが消える。けっこう危うい言葉の選び方の詩

じゃないか。タイトルの「好餌」はひねりが効いて面白いけど。自分が格好の餌として、お誂えむきの批判の対象になったということだろう。

これら2つの文を表裏に書くことに、何か批評的な狙いがあるのだろうか。考え過ぎというものかもしれない。しかしあれこれ考えるより先に私自身もまた、「今日はおしまい」と言いたくなった。それでも、笠間が借り出していったと思われる思潮社の現代詩文庫、あるいは角川文庫の『吉野弘詩集』に掲載されているはずの原詩を確かめようと、書棚を探したが2つとも見当たらない。貸出ノートにも記録がなかった。

3 「猫のかご」

(4冊目, 34ページ)

夜中から朝まで降り続いた大雨の上があったある土曜日、ノートの4冊目を持って塚山公園に行った。まだ濡れているベンチにビニールの買物袋を敷いて座り、調べるというよりもぼんやり文字を眺める感じでページをめくっていると、34ページに「猫のかご」という短い文章があり、たまたま「となりの席のかみの毛の真っ白なおばあちゃんがね」という書き出しの文が目にとまった。先の電車の中の老婆の話の続きかと思ったが、別のバージョンらしい。たぶん後からふんわりと頭に浮かび出たのだろう。

となりの席のかみの真っ白なおばあちゃんがね、ゴソゴソ買物袋をのぞくんだ。そのたびにひじが、ぼくのむねをつつくのさ。なんだか、ついてない。でも、そのおばあちゃん、きゅうに席を立て、ドア近くにいた腰の曲がったおばあちゃんに席をゆずりに行った。しまった、ぼくがゆずるべきだった。もうすぐ6年生なんだから、それくらい気づいてもよかった。それに、腰のまがったおばあちゃんは、猫の入ったかごを持っていたんだから、なおさらだ。ぼくは立って、席をあけた。2人がすわってしばらくすると、かごのすきまから、猫のミャーミャーミャーと鳴く声が聞こえた。

「お元気なようすで、いいですね」と白い頭のおばあさんが、猫のかごを見ながら話しかけた。

「おかげさまで。今日はきげんもいいので、ひさしぶりにお出かけなんです」

「それはいいですね。お2人そろって、うらやましいです。猫さん、いくつなんですか？」

「87です」

「あら、うちの主人と同じです。うちは、猫への成型は、とても高くてむりなんで、あきらめて近所のホームに入れました。犬ならお安いですけど、ちょっとね」

「ええ、いまさら、ベタベタなつかれるのもいやですものね。いえ、うちだって猫にするのは大変だったんですよ。退職金をたくさんつぎ込んで、80の誕生日のときに、思い切って猫になってもらいました」

「猫成型にも保険がきくといいんですけどね」

かごの中の猫さまが、ひと声大きくニャオーと鳴いた。たぶん、おしゃべりがうるさいと怒っているんだと思う。

猫かごのおばあさんは、次の駅で準急に乗り換えていった。かみの真っ白なお婆さんも、その次の駅でおりた。

ぼくは席にもどって、いびきをかいて寝ているパパのわき腹を突ついた。パパはおどろいて目を覚まし、「あっ、池田専務、おひさしぶりです。猫になられて、ますますお元気そうで、ムニャムニャ……」と寝ぼけ声でつぶやいた。

「ねえ、ぼくさ、ぜんぶ知ってるよ。パパがどんな夢を見たか」

「えっ、そうか……。とにかく、まあ、保険がきくようになるといいな、むにゃむにゃ」

パパは寝ぼけた声でそう言うと、また眠ってしまった。

〈寸感〉

帰宅してすぐにこの文章を書き写しながら感じたが、小学校5年生の持つリタラシーには微妙なものがある。漢字使用に無理があるかもしれない。でも、そこが面白い。だからこそ父親の見た夢をぜんぶ知っているという超常的な結びが生きる。前の話のバージョンと吉野弘の詩とのつながりがないと成り立ち難い話に思えるが、どうだろうか。いずれにせよ、わざわざこれを残したのは、夢の転写のような話が気に入ったからだろう。後日、吉田知子の「箱の夫」を思い出したが、貸出帳と本そのものにも読んだ形跡はなかった。

4 「はやり正月」

(2冊目 103-130 ページ)

テレビで朝の天気予報を見ると、前線が九州から東北まで伸びている。出かける予定をやめて、「ブラック・ノート」としばらく気になっていた『江戸の上水道と下水道』(吉川弘文館)を読むことにする。「はやり正月」はローカル列車の車内風景のスケッチから始まり、ある夏の出来事が語り手の「私」の視点から語られている。なるべくこの話の「筆触」のようなものが伝わるように「あらまし」を述べるが、はたしてどうか。

〈あらまし〉

ある8月の盛夏の午後、私は芸備線に乗り、広島駅から三次へ向かっていた。三次にある乳業メーカーに、宣伝パンフレット用の写真撮影の打ち合わせがあった。自然食品の店を中心に取引のある会社だという。仕事を仲介してくれた広告エージェントの担当者は、1つ後の列車で現地に向かうことになっていた。新幹線の遅れで同じ列車に乗り損ねたという。

芸備線は豪雨による土砂災害がたびたび起こり、路盤流失で復旧に1年を要した年もあった。

車内はサッカーやバレーボールの試合を終えたい高校生たちが席を占拠し、ほぼ全員が眠っていた。足を通路に投げ出して、肘掛けを枕にしている者もいた。私の席は運転席に近いボックス・シートで、隣の窓側の席に男、向かいに2人の女性が座っていた。3人とも同じ20代半ばの青年たちで、会社の同僚らしく、共通のアタッシュケースを用心深く膝の上に乗せていた。広島駅を出るときから賑やかな話が続き、上司の噂やグルメ情報など、話があちらこちらに飛んでは、また戻る。

「ミユキ係長、40になったんじゃないと、知ったった？」と窓側の女性が言う。

「へえ、そんなおばちゃんなんね。ぜんぜん、わからなかったわ」と男はBOSS コーヒーの空き缶を座席の下に置きながら応じた。

「えらい若う見えるよねえ」と私の前の女性は細い声で呟いた。

「どうしてばれたか、知っとる？　それがヤマキ課長がね、みんなの前で誕生日に、40歳、おめでとうって、うっかり言うてしまうたんじゃと」

話の引き返し役は、この窓際の女性らしい。

「そりゃあ、ひどいわ。ぼくでもそんな失敗はせんよ」と男の奇声が私の耳元に響く。

課長の誕生日祝いの言葉が、どうしてまずいのか私には理解できない。

声の細い女性が新情報を伝え、文脈を変えにかかる。

「うちね、前に八丁堀のイタリアンで、ミュキ係長に会うたことあるんよ。知らん人と食事をしてよっちゃった。それがね、会社におるときみとうな、きびしい顔じゃのうて、えらいやさしい感じで、別の人みたいじゃった」

「それ、あのしらすパスタの店じゃないん？　ちがうかね。そう、そう、最近評判の店、知らん？　八丁堀に古民家を改装したフレンチがオープンしたんよ」

「そりゃ、そうじゃろう。あの人は。自分を使い分けよる」と男は話を戻してしまう。

「うちにゃあ、ぜったいできんわ」

「うちもむり」と言っ、物静かな方の女性がトイレに立った。

しばらく戻ってこない間に、列車は次の駅に着き、中学の低学年くらいの少女が私たちの前に立った。すると席を外している女性のアタッシュケースを、男が隣の女性の膝に移し、「どうぞ」と少女に言った。促されて少女が座ると、2人は顔を見合わせて笑った。他人事ながら私は軽い動揺を覚えた。少女は一礼して座ると、すぐにスマホ画面に集中し始めた。

もどった女性は、席がなくなっているのを見て、声には出さずに「あっ」と驚きの表情を見せた。2人の男女はまた笑いだし、困惑した女性はその様子に合わせて笑顔を作ってから、運転席の窓に移動して、前から迫ってくる田園の風景を眺めていた。電化していない路線なので空が広く見えた。運転室の上には、三重県の観光ポスターがある。「夏休みには三重に行こう。きもちいいのが三重マルなのだ」。芸備線に貼って、どれほど効果があるだろうか。私にはわかに落ち着かない気持ちになった。

席の男女は何事もなかったように、1カ月で辞めた新人の話 시작했다。この3人の同僚たちの関係は、いったいどこに問題があるのだろうか。私は目の前に宿題を置かれた気分で、頭をめぐらす。

男がおしゃべりな女性に余計な気を遣っているのは、すぐにわかる。当のおしゃべりな女性は、実はとても気が弱いかもしれない。弱いから、しゃべり続ける。よくあるケースだ。一番問題なのは、おとなし気な女性かもしれない。本当は意外に神経がタフなのだ。しかし、だから何だというのか。私はしだいに考えるのが面倒になった。

列車は多見中という駅に着き、広島行きの列車を待つ待避線に入った。5分間の停車のアナウンスがあつてドアが開き、蝉の声が熱い空気と一緒に入りこんでくる。無人駅だが、乗降口の脇に赤いコカ・コーラのロゴの入った自動販売機が見えた。私は気分を変えるために、荷物を持って外に出た。ついでに、相変わらず運転席を覗き込むように立っていた女性に「席、空きましたよ」と声をかけた。女性は会釈だけを返して、席には戻らなかった。

自動販売機には、なぜかコカ・コーラのライバル社の奥大山の天然水があつて、飲み込むにつれて冷水が胸の中に沁みこむのが分かった。プレハブの白い駅舎のほかに建物はなく、橋を渡った先に集落が見えた。

電柱が1本もない駅前風景に私は清々しさを覚え、深呼吸をした。息を戻した時、集落の先の方から祭りのような笛と太鼓の音が聞こえて来た。音に引き寄せられて進むと止まり、また歩を

進めると聞こえなくなった。それを繰り返すうちに橋を渡り、集落の入り口らしい場所に着いた。朽ちかけた円柱が2本立っていて、そこに門松が飾られている。道を進むと人気のない家がまばらに何軒か続き、どこの玄関にも大きな松飾りがあった。蝉しぐれの降りそそぐ中で目にする松飾りに好奇心がうごき、私はこのちぐはぐな光景をしばらく楽しみたくなった。それにつれて三好の牧場での仕事の約束は、もはや記憶の奥に遠ざかった出来事のように、実感がなくなってしまった。

村落への誘いの幻聴のように聞こえた笛と太鼓は、すでに消えている。左手の檜並木の正面に社が見え、耳を澄ますと人の気配を感じた。その方向に進んでいくと、玉砂利を踏む足音が視線を集めた。20人ほどもいただろうか、男女の顔がいつせいにこちらを向いている。威圧感があったのは一瞬で、人々の間に途惑いの表情が浮かんだ。

仮設のテントが建てられ、宴席の用意があった。酒瓶が並べられ、黒塗りの重箱もある。「どちらから来られましたかね？」

集団の中で、一番若そうな30代半ばくらいの男が訊いた。すると反対側に座っていた恰幅のよい老人が手を伸ばし、男の頭を叩いた。すると周りの人びとがそろって、口に手を当てて、何もしゃべるなという仕草をした。老人はテントの脇にあった丸椅子を指さし、私に座るようにと合図した。言われるまま身を固くして、事態の成り行きを見ていたが、全員が押し黙ったまま何事も始まる様子はない。そのうち、皿も箸の用意もないので、重箱も空なのではないかと思い始めた。

木立に囲まれたテントの向こうは、稲穂が炎天下で風に揺れている。木々の密集した枝葉を通ってくる熱風は、涼感を含んで肌になじんだ。

束の間、眠気を覚えたとき、たぶん頭を叩かれた男の妻と思われる、若い女性が私のもとに来て、供え物に敷く半紙のようなものを手渡した。伝言があって、こう書いてあった。「お正月をして居ます。若水迎えをして居るところですから、水を迎えに行っている年男だけでなく、邪気を払うために、みんな口をつつしみ、黙って居ります。ご協力を、乞ひ願います。一同」。

そういうことならば、私はもう退散の方がいいかもしれないと思った。急げば、次の列車に間に合うはずだ。半紙の裏に、その旨を記して近くに座っていた立派な鬚髯を伸ばした老人に回送を託した。老人が目を通してから、全員に渡った。誰が書いたものか、ふたたび新たな紙が回って来て、「この日に、たまたま外からいらした来訪の方は、吉兆をもたらすと言われています。明日の朝までご滞在を切に乞ひ願います」とあった。続けて2枚目が来て、「粗末なものですが、ご夕食、お部屋は用意いたします。後ほど、堂上という者が案内いたします」と前とは違った筆跡で書いてあった。

堂上は集団の奥にいた私と同じ世代くらいの小柄な男だった。丸顔に大きな目が特徴で、ここから中国山系を越えた島根出身の元首相の容貌を思い起こさせた。縁由を守って、この人も沈黙を通した。案内されたのは無人となった古民家で、20畳ほどもある居間の真ん中に寝ることになった。堂上との別れ際に、いったいこの村に何が起って、正月をやり直しているのかと、疑問を走り書きして渡した。文面に目を通した顔に思案気な表情が浮かび、軽くうなずいた。

夜になると堂上が現われ、昆布の握り飯が2個とお煮しめ、茄子の漬物にお茶のペットボトルを運んできた。相変わらず口を開かず、盆の上の書付けを手で示してから、立ち去った。文面には、村は去年に続いて豪雨で大事な山が崩れ死者が出たこと、その山は長年にわたって松茸の豊かな収穫があったこと、若い連中がつつぎつつぎと村を出ては行方がわからなくなっていることが書

いてあった。

窓から涼しい風が流れて来たにもかかわらず、その夜、私は寝付けなかった。居間の大きな柱時計の動く音と、天井をネズミが走り回る音が眠りを妨げた。暗闇の中で天井を見上げ、ネズミたちの動線を頭の中で描いているうちに、黒々とした線で埋まり、ますます目が覚めてしまった。ようやく眠りこんだのは朝になってからだった。

目覚めたのは昼近くで、柱時計の針は11時50分を指している。部屋の隅には前夜と同じ盆に、餅と鶏のささ身に三つ葉の雑煮、小さな重箱に野菜が中心のおせち料理、そして形だけのお屠蘇が並べてあった。私は空腹を覚え、一気に食べた。餅はすでに汁に溶けかけていたが、その歯ごたえも楽しむ気分だった。脇にお年玉袋のようなものがあり、開けてみると、紙片に「謹賀新年。ありがとうございます。どうぞ、お気を付けてお帰り下さい」と記してあった。

村には人の気配がない。私は急いで駅に向かった。小走りになっている自覚はあるのに、足は動かず、暑さで汗が吹き出してくるばかりだった。蟬の隙間のない鳴き声が暑さをますます煽った。

公衆トイレに似た造りの白い駅舎が遠くに見え、折よく列車も止まっている。私は鞆を横抱きにして疾走し、ドアの閉まる直前に車内にたどり着いた。

息を整えてから、あたりを見回すと前日と同じ光景がある。席のなくなった女性が運転席の窓から行く手を見つめ、ボックス・シートの向かい合った席では男女が「知っとるかしらんけど、ミユキ係長、会社におるあいだだけで、3回も歯磨きするんよ」と相変わらず賑やかな話し声をたてていた。隣の席の中学生もスマホ画面を覗いている。高校生たちも大きなスポーツバッグを枕にして眠りこけていた。「席が空きましたから、どうぞ」と私は立っている女性に声をかけたが、今度も会釈だけが返ってきた。

〈寸感〉

結びの文は、「しばらくして私は元の席に戻り、背後に流れていく窓外の山あいの家々を見つめながら、溶けかけた餅の入った雑煮の味をしきりに懐かしんでいた」というもの。

タイトルにある「はやり正月」とは、災害など凶事のあった年に、厄払いの意味で正月を迎え直そうとする臨時に設けられる村落共同体の休日のことのようなのだ。

私もかつて1度だけ芸備線の三好方面から広島行きの列車に乗ったことがある。沿線に沿って山と川が多かった印象がある。舞台になっている場所はどのあたりか、記憶の中の風景をたどり始めると、にわか探訪に行きたくなった。

5 「アヒル」

(5冊目, 72-88ページ)

にわか雨を避けて入った喫茶店、蔓薔薇の模様をあしらった衝立や籐の長椅子があり、昭和の面影が残る。サイホンが並び、フラスコの湯が沸騰している。

持参した「ブラック・ノート」を開くと、「アヒル」とタイトルのある文が目に入った。読後、生々しい甲高い声の立ちのぼる情景が思い浮かんで心がざわめいた。「アヒル」は「家鴨」と漢字表記にした方がよかったのではないかと思う。

〈あらし〉

中国、清朝中期の話である。唐の時代から続く旧家の料理人である陳明は、60歳の誕生日を迎えたばかりである。妻は10年前に亡くなり、子どもはいない。邸の主人は陳明の長年にわたる厨房の仕事への慰労と誕生日の祝いを兼ねて、特別料理でもてなすことに決める。もちろん、作るのは陳明と弟子の中年男の2人である。しかし当日になり、弟子は妻が産気づいて、手伝えなくなる。

主人はとっておきのアヒルを祝いの晩餐のために、どのように料理をするか、指示を出した。

まず大鍋を用意し、ほどよく塩を入れた水を沸騰させる。鍋の回りには熱した鉄板を敷く。陳明は翼を切った生きたままのアヒルを金属板の上に放す。灼熱の金属板で火傷をしたアヒルは、苦痛のあまり、あわてて鍋の中に飛び込む。ところが、家族と一緒に楽しく泳ぎ回っていた水たまりが、今や熱く煮えたぎっている。

アヒルは眩暈をおぼえるが、必死になって金属板に戻る。この呪われた極熱板から逃れるために、やがて自らの煮汁となる沸騰した液体へまともや飛び込んでしまう。恐怖から逃れるはずの行為は、また別の恐怖を選ぶ結果になる。

主人は陳明の特別料理の手際に満足げに微笑む。このようにして調理したアヒルの味にこのほか執着があったのだ。主人はあらゆる香辛料の繊細微妙な味付けには飽き飽きしていた。生まれてからずっと竹垣に囲まれた池をのんびりと遊泳して過ごしてきたアヒルが、恐怖に襲われた獲物の身体となって、野生の香気を取り戻す。家禽は何世紀もの間、安穏とした飼育場暮らしで、荒々しい野性を失っていた。ところがこの単純な料理手順の変更で、アヒルの筋肉は失われていた美味極まるアミノ酸を分泌することになったのだ。

陳明は自ら準備した祝いの料理を感謝しつつも、食が進まず、気分の悪さをおぼえるが、笑みは絶やさない。主人は使用人の複雑な表情を特別料理の付け合せとして味わっている。

祝いの膳の最中、陳明の弟子の妻が、女の子を産んだという知らせが入る。主人は「それは、よかった」とうなずき、新たな賑わいが加わる。

使用人部屋から、元気のいい赤子の声が邸に響く。だが、主人は恐ろしさに身をこわばらせ、一同は息を殺して泣き声に耳を澄ます。苦しい家禽の音が、家のすみずみにまで、どんどん広がっていくのだ。

〈寸感〉

この短編は究極のグルメ小説としても読み得るかもしれない。

末尾に「付記」として『トラヴェルス／4 恐怖』(リポート)のジャック・ベルトラン「我恐怖す、故に我逃亡す」に引用されているル・クレジオの『逃亡の書』の一節をヒントに転用を試みたとある。これは私の蔵書にある本だが、おかしなことに『逃亡の書』には該当の文章は見当たらない。思い違いというより、これ自体も笠間の仕組んだフィクションなのかもしれない。

6 「ポスタル・サービス」

(20冊目, 109-146ページ)

郵便局の夜間受付に書留を出しに行ったが、21時終了に変更になっていることをすっかり忘れていた。帰路、コンビニに寄って乾電池を買った瞬間、「ブラック・ノート」の何冊目かに郵便をめぐ

る文があったことをふいに思い出した。乾電池から郵便への連想の道すじは判らない。

見つけるのにやや手間取ったが、最後のノートの中ほどにあった。このあたりの文は、鉛筆書きの薄い字だった。

投函すれば冥界の住人から返信が届くという3つの郵便ポストの話が記されている。『ゲゲの鬼太郎』の妖怪ポストをふと思ひ起こさせるが、ここでのポイントは往信と返信の行き交いのおかしさにあるようだ。

〈あらまし〉

《第1ポスト、東京都豊島区、雑司が谷霊園》

都電荒川線の踏切を渡り、雑司が谷霊園に入ってすぐ左手に朱色の郵便ポストが目に入る。このポストは黄泉の世界につながっていて、この墓地に眠る人に手紙を書くと、返事が届く。返信の封筒の表書きには、「雑誌」の黒い刻印があるという。ただし、返事は数日でくるときもあれば、数年かかる場合もある。

泉鏡花宛の例で、23年後に届いたという話もある。永井荷風で通常2、3年後らしい。もっとも早いのは東条英機で、1週間以内に届いたが、誰がどのような内容の手紙を出しても、和紙1枚に筆で、「尊翰確かに拝受致し候。深甚の謝意を申す。貴殿の恙無き日々を祈念致し候」と書いてあるだけだ。

村山槐多の場合、返信は気まぐれに葉書で届くが、手書きの絵が入っている貴重なものなのだが、絵柄はどれも共通した「尿をする少年」が描かれている。イラストが入っている葉書となると、まだ2枚しか例がないようだが、初代江戸家猫八の招き猫のめでたい絵柄がある。

夏目漱石は黄泉の国でも多忙なはずだと思うが、いかにも刻苦精励の人らしく、あまり間を置かず返事が来る。ただし、ここでも猫が登場し「代、名無し猫」と署名が付く。この「代」は代筆の意味だ。まれに太字で勢いのある字で返事が来ることもあり、そこには「代、坊」とあり、どうやら「坊ちゃん」の代筆らしい。さらに珍しいのは、「代、三」とある返信で、かすかに白百合の香りがするので、『それから』の三千代の代筆だと推測する者もいるが、それは願望からくる思いこみにすぎず、三四郎が正しいようだ。

雑司が谷霊園の漱石の墓石はひとときわ大きく、周囲に野良猫がたむろしていることが多い。そのなかで、三毛の老猫が到着郵便の差配をしているという話もあるようだが、まだ確証を得ていない。

《第2ポスト、北海道函館市、立待岬》

函館山の麓の霊園地区、立待岬の石川啄木の墓地および歌碑近くに旧式の円筒形の郵便ポストが置かれている。

ここに啄木宛ての短歌の郵便を出すと、冥界から啄木の添削付きで返事があるという。ただし、ここ20年ほど返信もまれで、理由として推測されるのは、添削料金として封筒に1万円札を入れた者がいて、それが不興を買い機嫌を損ねたことだ。直ちに「無礼」と記した紙片とともに送り返された。いくら借金に追われ、貧窮のうちに世を去った身とはいえ、黄泉の世界に行つてまで同情されるのは屈辱的で、自尊心が傷ついたのでだろう。あるいは、逆の見方もあって、天才歌人に添削を求める金額としては、あまりに少なすぎて腹を立てたのだという。

さらに有力な意見として、このような事実の指摘もある。啄木の短歌を揶揄する歌をわざわざ

立派な短冊に書き、署名を入れて返送してほしいと言った悪戯好きがいて、あろうことか、当人から「駄作」として朱字の入った返信が届いた。どうやら啄木自身、酩酊状態で遊びに付き合い、うっかり凡手きわまる添削をしてしまった。受け取った投函者は大いに喜び、あちこちで自慢げに吹聴した。この事実を別の人物が注進におよんだことで、啄木は自らの不覚を知り、それを機にどの手紙にも返事が来なくなった。

投稿者は仙台の地理学を専攻する学生であったが、10年後にその貴重な短冊を神田神保町のY書店に売却した。問題の戯れ歌は、「啄木の／ピストル短歌／空鉄砲／われ泣きぬれて／ぢつと手を見る」。これをこのように啄木は添削したらしい。「啄木の／ピストル短歌／空元気／われ泣きぬれて／人生終る」。

啄木のピストルの短歌は、「人生終る」の語句の見える「こそこの／話がやがて／高くなり／ピストル鳴りて／人生終る」とか、また「いたく錆し／ピストル出でぬ／砂山の／砂を指もて／掘りてありしに」などがある。問題の投函者は、「ピストル短歌」だけでなく、啄木の歌の全体をからかって「空鉄砲」と言ったのかもしれないが、それでも不興を買うほどに出来の良い戯れごとではない。

《第3ポスト、長野県松本市、上高地》

梓川にかかる河童橋の上流から見て左手の脇に、木々の生い茂る季節は葉陰に隠れて目立たないが、小さな郵便ポストがある。小鳥の巣箱ほどの大きさで、朱色の塗料もはげかけ、いつ設置されたのか不明だ。差し入れ口も狭く、大型の封書は入らない。

橋の名の由来は、梓川の淵の奥に河童が棲息するという古い言い伝えによるとか、あるいは橋のできる前、頭に衣服を載せて川を渡る人の姿が、河童に似ていることからくるとか、諸説あって正確なことはわからない。

ここの郵便ポストの特別なポスタル・サービスは、河童宛てに送ると魚に似て生臭い薄緑色や灰色や折々で異なった色に染めた封書が届くというもので、芥川龍之介の最晩年の小説「河童」が深く関与している。語り手の精神病院の患者第23号によって証言されている「河童の国」だ。「河童の国」が、「患者23号」の狂気のなかにだけ存在すると思っている者は、いくら手紙を出しても返事は届かない。その実在を信じたならば、入院中の「患者23号」のもとへ次々と旧知の河童たちが見舞いに訪れたのと同じく、嬉しくも投函者へ直接持参する河童もいるらしい。「患者23号」の同病者のみならず、その病院の医師や看護師が比較的よく返事をもらう事実は興味深い。「患者23号」が河童語の翻訳者の役割を果たしていたことも大きいかもしれない。手紙の相手は、漁夫のバッグ、医者 of チャック、詩人トック、音楽家クラバック、哲学者マッグ、裁判官ベップ、資本家ゲエル、学生のラップなど、

そのほかにもこの上高地のポストから「河童の国」への郵送はややこしい事情があるようだ。大きな理由の1つは、梓川のこの国が奥深い淵の地下にあるとはいえ、黄泉の世界ではないことだ。人間の価値観と真逆ではあっても、それなりの政治、経済、司法制度を持ち、文化活動も盛んな社会として存在している。

しかし、最近にいたってなお深刻な事態も推測できる。医者 of チャックから信州大学付属病院のA医師に届いたぎこちない日本語による手紙によると、未知のウイルス感染症の蔓延で、仲間たちは絶滅寸前で、生存が確認できるのは学生のラップだけという。

「きゅう状を、クワ、お伝え申すぞ。われら、クッ、かっぱはな、死に体によって、わしと、ラップのみ、クァ、この知らぬぞんぜぬ未知の感せんの、やまい、まいったな、かっぱ界で、いちばんの医者、このわしゃでも、直すのやっかいじゃて、へのかっぱ、とはいかん、むかし、むかし、あんたら、クヘー、かんじゃ23号が、ウイルスを、クック、もっちこんだようだ、そのウイルスが、眠りから、なぜか目ざめやがった、クソイー、よって、かんせん、COVID-23とな、呼ぶでござるのだ、クワッ、責にんとれとか、かっぱらいとか、かっぱ殺しとか、クッハ、いわんぞな、われら、人げんどもと、ウッ、臭セーなこの『人げん』という言葉、人げんとちがってよ、とにかく、逆なんよ、考えがね、それ故に、あんたらに、差しあげ、いたしたくそうろう、よって、わが身を焼いた、クワ、粉まつ、さしあげ、キクキク、クァ、つかまつる、ギフットじゃ、クワ、このかっぱ焼き粉末、人げんだけには、なぜかは知らねど、クワッ、ワクチン代わりに、キッ、きくかもしれん、だが、困ったことによ、せっかくの身を粉にした特こう薬を、クァッ、誰があんたらに届けるか、頼みのラップは、生き残っていることは知っておるが、クックワ、どこに消えたか、わからんちん、どうすりゃいいのさ、このわたし……。」(以下、判読不能)

〈寸感〉

3つの話を合わせて原稿紙換算(400字詰)65枚ほどになろうか。残念なことに、途中で終わり、『河童の国』の医者チャックの人間界への稀少な薬の贈与の成り行きが判らない。

第1ポストに関していえば、雑司が谷霊園に眠っている重要な人物として、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)がいるはずだが、言及がないのはなぜだろう。ハーンこそ冥界の消息に通じた人物のはずだから。英文レターを書くのが面倒だった者が大勢いたからとも思えない。貸出ノートを見ると『小泉八雲コレクション』(ちくま文庫)をまとめて借り出した形跡があるので、付け足すプランがあったのかもしれない。

貸出記録では、『啄木歌集』(岩波文庫)のほか『啄木日記』(春秋社)もあった。あらためて歌集を眺めると、ピストル短歌としては、引用の2首のほかにハルピン駅頭で安重根に銃殺された伊藤博文に仮託した「誰そ我に／ピストルにても／撃てよかし／伊藤のごとく／死にて見せなむ」もあった。これは駄作と思えるが、誰が言ったことだったか、名歌集や名俳句集、あるいは魅力的なアンソロジーの条件は、傑作だけを揃えるのではなく、凡作や駄作をうまく混ぜることにある、と。

芥川の本は借りていった記録がない。ただし、「河童」が収録されているいくつかの蔵書のなかで、なぜか『妖怪文学館・芥川龍之介全集』東雅夫・編(学研M文庫)に、オレンジ色以外の、しかも私自身には覚えのない付箋がところどころ貼ってある。その箇所をたどっていくと、すべて学生のラップの登場するページだった。未完のまま終えたが、何らかの話の展開を考えていたのだろう。

7 「ラップの行方」(仮題)

(23冊目、6、8、11、13、15、19ページ)

中断した「河童」の話のことは、たいして気にも留めていなかったのだが、5日ほどたった頃たまたま開いたノートの最初のあたり、しかもとびとびのページに付箋の理由を推測できる走り書きを見つけた。ラップのその後の運命が記してある。タイトルがなかったので、「ラップの行方」と仮に名づけておく。

〈あらし〉

家族制度の軋轢に苦しんでいたラップ。窓の外を見て、「おや虫取り董が咲いた」とラップが呟いただけで、妹は嫌味を言われたと誤解。それをきっかけに、一家は母、父、弟を巻き込む騒乱状態に陥ったりもした。だが、今や「河童の国」で最後の1匹になった身の運命を思うと、家族の葛藤や諍いなど、胸苦しいほど懐かしい。

ラップはチャックから託されたチャックによるチャック自身の焼き粉末、COVID-23の特効薬を持って、「河童の国」を後にした。梓川を下り、松本に出て、中央本線・特急あずさの給水タンクに身を潜め、新宿駅に着いた。ここからどうするか？ 一応プランは作ってきた。漁夫のバッグが言ったように「東京の川や掘割りは河童には往来も同様」なのだ。まずは淀橋を目指し、神田川にたどり着く。しかし、その前にチャックから頼まれた手順で、COVID-19が収まった後に、猛威を振るうCOVID-23への特効薬の入った容器を東京都第一庁舎の玄関前に置かなければならないぞ。容器は梓川に捨ててあったエビオス1200錠の空瓶を利用したもので、シールが完全にはがせず、「ビール酵母」「弱った胃腸に」の印字が薄く残っていることが気になるが、チャックの告知文を巻き付ければ隠れるはずだ。ラップはどきどきとして、紙を失くしていないか確かめてみた。チャックの跳ね上がるような筆跡があった。それなりに日本語学習をしてきたラップなので、何とか判読できた。

「告知 人るいの諸君へ、つつしんで申す。クワッカ、カ。ここにあるのは、あのな、COVID-23の特効薬ですぞ。0.001グラムの粉末ごとに、ケツ、360ccの水で溶いておくんなさい。服用は1人1ccでたりるでござる。この名医のチャックがつつしんで予告するがね、クワツ、5年後におそろしい感染しょうが、東京から世界に広がるはずによって、まずは、東京都知事に薬を託す。そなえろ、そなえろ。あとはよきに、はからえ。こら、横取りなど、するな、無れい者め、クッカ、カッ、たたりがあるぞ。そんじゃ、人るいの皆さん、達しゃで生きよ、さらばじゃ、クワック、クツ。河童国医師、チャック記す。」

さて、新宿駅から都庁舎まで、どのように行くか。川も掘割りもない。しかし、あの「患者23号」を病院へ見舞いに行ったのは、これもバッグが説明したように、水道の鉄管を抜けていけば造作もない。もっとも、その訪問こそが河童の国に感染症をもたらしたのは、疑う余地のないことだが。

そこで、このまま順調に手順を踏んで、ラップは淀橋から神田川の水に浸かることができるはずだった。実際、夜明け前の時間を見計らって特効薬の瓶を都庁舎の玄関の前に置いてきたものの、何かふつふつと気持ちにわだかまりがある。そんな貴重な薬の頒布を、お偉いさんに頼み、正しい政治的対応を期待するなんて、ばかげているのではないか、人間どものせいでオーストラリアやアマゾンの森林火災が起こり、静かに棲息していたウイルスが人間の世界に越境したのだ。河童の国が減んだのも、結局は同じ理由だ。それなのに、特効薬をプレゼントする？ とんでもない倒錯だ。ラップは慌てて薬の入ったエビオスの瓶を取り戻しに行った。しかし、見つからない。翌日、不燃ごみの置き場をあさってみたが、それらしい廃物はなかった。

あきらめるほかはない、と思いかけたとき、ラップはチャックに何かたくらみがあったのではないかと思いついた。告知文に書いていないが、河童焼き粉末薬には人間が飲んだ場合、重大な副作用がある。服用して効果が出始めた頃合いに、すべての患者は自分が河童になったという強烈な幻覚に襲われるのだ。しかも河童としての同一性に取り憑かれ、河童でないものを嫌悪しバッシングする。右手右足、左手左足を揃えて跳ねる河童踊りに夢中になる。いずれも本物の河童にはない性向である。川や池があると飛び込みたくなるのは、本物河童も人間河童も変わらない。

ある昼下がりに、ラップが淀橋の下の暗がりでは微睡んでいると、クワッ、ク、ケッ、クワッという叫び声が聞こえてきた。仲間と思って喜んだのもつかの間、次々と人間どもが川に飛び込んできた。川面は河童と思いきんだ人間であふれかえり、ゆったりと柳橋から墨田川を経て東京湾、太平洋へと流れていったらしいのだが、いたるところで飛び込む者が後を絶たず、少しでも水に身体を浸せる隙間を確保しようと争い、怒号を応酬しあう狂騒状態になった。

ラップはこの事態に恐怖を覚え、神田川も人間河童だらけで安住の場所ではなくなったので、新宿西口超高層ビル街の地下の下水道で暮らすことにした。下水暗渠は大小の管が入り組み、探求心を刺戟し、その全体の配管図はいつまでもつかめない。

食べ物や日用品は〈借りぐらし〉で、超高層ビル街のコンビニ店からいくらかでも調達できた。ラップは地下の下水道で巨大な魚の影のようなものを何度か見た気がしたのだが、まだ遭遇していない。ラップは恐々とした気分で、かつて哲学者のマググから聞いた話を思い出した。江戸に大火のあった明暦の時代、稚魚として神田川を下っていった鮭が、300年あまり大海を遊泳した後、巨大な怪魚となって故郷の川を遡上し、淀橋で新宿の超高層ビル街につながる下水道に入り込み、暗渠を住処にしているという。

ラップは耳を澄まし、あたりの気配を探ることが習慣となった。異変を思わせる水音は聞こえない。それどころか、いつしか地上の人間たちの雑踏が消え去ったことに、身の縮む不安を覚え始めた。

〈寸感〉

しばらく前から眠気におそわれ、意識が朦朧とし始めており特記すべきことは思いつかない。ただ、この中で〈借りぐらし〉というのは、イギリスの作家メアリー・ノートンの『床下の小人たち』の主人公たちの暮らし方の借用であろうか。イギリスの田舎屋敷の床下に住む小人ファミリーが、上階の人間たちに気づかれないように食料や日常の必需品を借りて生活をしている。スタジオ・ジブリの映画『借りぐらしのアリエッティ』はこの作品をもとにしたもので、アリエッティは床下に暮らす少女。『床下の小人たち』は原書も翻訳もどこかにあると思うが、笠間は映画の方からヒントを得たのだと思う。江戸の巨大鮭のエピソードに関し、たしか「夜は○○○」とかいった小説で読んだようにも思えるが、記憶に濃霧がかかった感じで、まったく判らない。

8 「パリ、モンパルナス墓地にて」

(20冊目、147ページ)

「ポスタル・サービス」の次ページにあった断章。もしかしたら、雑司が谷霊園との連想で書きつけたのかもしれない。サルトルをサトリトとか、ボードレルをボードルルといった誤記があったが、適宜訂正した。

〈あらまし〉

メトロ・ラスパイユ駅から地上に出ると、雨の近そうな風を頬に感ずる。「ロトンド」でコーヒーを飲もうと思ったが、近くの「リトグラフィ」という画家が好みそうなカフェで一休みし、モンパルナス墓地のスーザン・ソントグの墓へ向かう。調べてきた区画どおり少しわき道に入ると、光沢のある黒御影石の墓石がすぐに見つかった。Susan Sontag 1933-2004。墓に供えようと、

ひまわりを持ってきたのだが、偶然にもすでに同じ大輪が置いてあった。ソントグへの供花は半分にして、近くのサミュエル・ベケットの墓に供えた。こちらは何もなく、大きな黒蟻が1匹、Samuel Beckett 1906-1989 と刻印のある字を斜めに横切り、縁に回って姿を消した。ボードレールの墓は次回にしたい。次回はないかもしれないが。

帰りに正門の近くのサルトルとボーヴォワールの墓をのぞいてみると、訪問者が絶えないらしく、墓の上はごみのように供え物があふれ、古い万年筆なども備えてあった。サルトルの養女もここに入るのだろうか。

サルトルは歳を重ねるにつれて、ガールフレンドはますます若い娘になっていき、56歳の時に愛人となったアルレット・エルムカウムとは、哲学の学位論文の助言をしたことで親しくなり、後に養女にしている。この事実をボーヴォワールは知らなかったとされるが、それは事実ではないような気がする。この時期だけでも、ボーヴォワールのほかに、5人の親しい女性がいたらしいが、サルトルは34歳年下のこのアルレットが特にお気に入り、不動産や著作権などの全財産を残した。「でも、モンパルナスの墓と一緒に眠るのは、私だ」とボーヴォワールが言ったかどうか、私にはわからない。

〈寸感〉

モンパルナス墓地には、モーパッサンやマルグリット・デュラス、イヨネスコ、トリスタン・ツァラといった文学者のほかに、画家のロートレック、作曲家のセザール・フランク、サン・サーンス、ピアニストのクララ・ハスキル、映画監督のエリック・ロメール、俳優のジーン・セバーグたちが眠っているはずだ。

少し意外な印象を持つのは、この墓所には写真家のマン・レイの墓もあるはずで、笠間の仕事から考えれば、参拝してもよかったのではないか。ただし、ソントグの墓を目指したことはよくわかる。『写真論』の著者だからだ。『写真論』（近藤耕人訳、晶文社）はペーパーバックの原書と一緒に借り出した記録がある。この本についての記載がどこかのページにあるかもしれない。

このモンパルナス墓地訪問の一文で、一番印象に残るところは、黒蟻がベケットの刻字を斜めに横切って消えた情景だ。しばらくして、私はスイスのチューリッヒ郊外のフルンテルン墓地のジェイムズ・ジョイスの座像のある墓でも、プルーストの眠るパリのパール・ラシェーズ墓地のいささか厳ついオスカー・ワイルドの墓でも、小さな生き物を見た記憶が甦りかけたのだが、一瞬の幻覚のように過ぎ去った。

9 「メメント・モリ」

(37冊目, 29, 30 ページ)

スーザン・ソントグの墓参りをしたほどなので、『写真論』への言及があるはずだと探してみたところ、最後に近いノートのページに鉛筆で引用文と添え書きがあった。

「今はまさに郷愁の時代であり、写真は郷愁をさかんにかきたてる。写真は挽歌の芸術、黄昏の芸術なのである」とソントグは言う。写真はすべてメメント・モリ（死を忘れるな）に関わるものである、と。どのようなものであれ、写真に撮られるやいなや過去の時間に置かれ、郷愁の対象になるのだ。写真に撮るということは、相手の「死の運命、はかなさや無情に参入する」こと

なのである。だからこそ、写真はいつも「挽歌」なのだ。

「挽歌」と「黄昏」か、と私は眩き心を鎮める。これまで写真を撮ることで、いかに多くの「死」に加担してきたことか。明治日本に初期の写真が入ってきたとき、撮影に応じるやいなや魂を抜かれると人々が恐れたことは、あながち迷妄ではないのだ。

一方で、私が商品カタログや料理のメニュー写真の仕事を好んできた理由もわかった気がした。そこには「過去」へ追いやる時間ではなく、これから何を買って求めようか、これから何を食べようかという期待感と欲望が未来の時間をおおらかに引き寄せているからだ。

〈寸感〉

笠間の詳しい仕事の内容は知らないが、この内省的な文には、あれこれの思いが湧き起る。旅先ではどのような写真を撮っているのか。「ブラック・ノート」に今のところ1枚も写真が見つからないのだが、はっきりした意図があるのだろうか。そしてここに書かれている思念とは必ずしも直結しないのだが、この人の家族写真を見たい気持ちがふと動いた。どのような家族がいるのかという関心もさることながら、むしろおそろおそろ家族の秘密に目をやる感じ、明るく鮮明に感光されているのに仄暗い人影を追う感じというか、まるで怖いもの見たさで家族写真を覗きこむ……と、なぜそんな衝動が誘発されたのか判らないのだが、「死の運命、はかなさや無情に参入する」行為とどこかで重なるのだろうか。

10 無題

(37 冊目, 30 ページ)

ソントグの『写真論』の他に、笠間がどのような写真関係の本に関心があったのか、いずれ判るよ
うに思うが、この文の後にやや広い空白をはさんで引用文だけが置かれている。

「意味の側から全体を俯瞰して見た世界は、まったく失望を誘うものであるが、不意に細部を見
たならば、世界はいつでも完璧に自明な存在である」

〈寸感〉

最初はソントグの文と思ったが、そうではない。これは社会学者ジャン・ボードリヤールの写真集『消滅の技法』（梅宮典子訳、PARCO 出版）からの引用。意外に知られていない著作で、アフォーリズム的な断章形式の写真論も収録されている。かつて私もこの本から、「何かが写真のイメージになることを望むのは、生き^{ながら}存るためではなく、より巧みに消えるためである」という一文をエッセイに引用したことがある。

訳者によれば、写真嫌いのボードリヤールだったが、1981年に日本へ来て、オートマチック・カメラをプレゼントされてから一変したという。日本滞在中に撮り始めて以来、旅の先々、日常の身近な光景など、撮影を持続していく。そしてボードリヤールは「旅、断章、写真」をトリロジーと呼ぶ。このトリロジー、すなわち三部作というか三幅対は、必ずしも自覚的でないにせよ、笠間の目指したことにどこか重なるかもしれない。

ところで、ジャン・ボードリヤールはこの『消滅の技法』の断章の中で、「光や影や物質が発する明証性、瞬間性、魔術性」を手に入れることのできた文学テキストとして、ナボコフとゴンプロヴィッ

チを挙げているのだが、笠間は気に留めたかどうか。

11 「メモリアル・ツアー」

(37 冊目, 12-28 ページ)

夜更けの就寝の時間になったころ、家の前の通りを消防車が4台、続けて救急車も通過していった。どこか近隣で起こった異変に耳を澄ますうちに、頭が冴えてきてしまった。気がつくと『写真論』と『消滅の技法』の引用の載った数ページ前を見てもなく開いていた。書き出しを読んでみる。

「普段は運転手たちの休憩室なのだろうか。ツアーの参加者が集められた部屋は、煙草の臭いを入れ替えるために使ったらしく、ローズの消臭剤の香りがほんのり漂っていた。私には苦手の人工臭だった。」

「メモリアル・ツアー」は、タクシー会社がサイド・ビジネスで始めた、マイクロバスによる日帰り旅行の話だった。

〈あらまし〉

東中野駅近くのYタクシー会社の営業所に集まったのは10人の男女。日帰りバス旅行「メモリアル・ツアー」の参加者だった。それぞれが最も思い出のある都内の場所をマイクロバスに乗って周遊するというもので、募集は15名。10名に達しない場合は中止だったが、私がちょうど10人目の申し込み者で、かろうじて企画は成立した。私にはあえて行きたい場所はなかった。というか、後でふたたび行きたくなる場所を見つけたいという、いかにも悠長な好奇心から参加した。

出発前の打ち合わせで、黒い細身のスーツを着こなした若いガイドが順路の説明を始める。ツアー・プランを作った当人で、稼働車を70台ほど持つ中堅タクシー会社の社長の次男だった。旅行代理店を任されたのは最近らしい。

参加申し込みの順に立ち寄る場所の紹介があり、祖母、娘、孫の男の子の3人は、世田谷区北鳥山の鴨池近くの辻だった。交差点ではなく、「辻」と祖母がわざわざ口にしたことに、なぜか私は背に一筋ひんやりしたものを感じた。すると2番目の初老の男も、大田区洗足池の池月橋脇の辻と同じ言い方をした。

ところが3番目に移るとき、カップルで参加していた中年の男女が、前もって場所を予告してはつまらないので、ミステリー・ツアーにした方がいいと提案した。ガイドの青年はとまどいの顔を見せたが、他の客たちからもその申し出に同調する声があがった。なぜそこに行きたいのか、参加者たちそれぞれが、場所にまつわる思い出話や因縁話を紹介することもバス旅行のメニューに入っていたので、その方が期待感も増すとグループで参加していた50歳前後の女性3人が意見を加えた。皆さんの話を聞くのが楽しみで応募したのだし、そうじゃなければ、わざわざツアーなどに来ないで、自分1人で出かけると。

運転手はガイドと小声で打ち合わせをした後、ナビゲーションに最初の目的地をセットした。バスは大久保通りから東に向かい、一方通行の抜け道を通って外苑西通りに出た。途中、渋滞で停車したとき、左手に外科病院の玄関の賑わいが目に入った。鮮やかな黄色のワンピースに白い帽子の装いの女性の姿が見え、医師か看護師か病院関係者たちの拍手を受けながら、花束を抱えて黒塗りの大きなベンツに乗り込んでいた。いったい何者なのか、謎めいた気分とともに、賑わいの光景がしばらく残像となって車を追ってきたが、窓外に緑が増えるにつれて消えた。バスは

神宮外苑に入り、丸いドームの聖徳記念美術館に着いた。駐車場に移動しながら、ガイドの青年にマイクを渡され、3人グループの女性の1人が、落ち着いた口調で話し始めた。

明治天皇の遺徳を伝える絵画を集めたこの美術館に、曾祖父が描かれている絵があります。それがどれか皆さんにあてて欲しいと、言いたいところですが、そんなことをしますと、この美術館見学だけで何時間もかかってしまいます。ですから、すぐわかるヒントだけで申し上げます。それは「馬」です。すぐ見わかりますよ。入場券、私たち3人以外に4枚ありますので、どうぞ。

祖母、娘、孫の家族が残った。私も辞退した。この美術館には、いきなり正面に明治天皇の愛馬の「金華山」の剥製が飾られてあるはずだ。そのことと必ずしも直結するわけではないが、私はこの建物のデザインも収蔵品もまったく苦手だった。残った1枚の切符でガイドが同行した。

車内にいる間、祖母が娘と孫の男の子に、この美術館の前の池には、夏になるとカッパがたくさん集まったという話をしていた。昭和34年から3年間、池が子ども用のプールになり、それが「かっぱ天国」と名づけられていたという。なんだ、本当のカッパじゃないんだと娘は笑い、つられて男の子も笑った。

やがてガイドが1人参加の男と中年カップルだけを伴って戻り、3人の女性は美術館で過ごすことに決めたので、この後の予定はキャンセルするそうですと告げた。ツアーの趣意に反する唐突な行動に、不満の声が出ると思ったが、何事もなかったようにバスは動き出した。私はガイドに、さっきの女性の言った、「馬」とは何だったのか訊ねた。代わりに1人参加の初老の男が振り向きながら答えた。タイトルは忘れましたが、明治天皇が奥羽巡幸中に見た馬引きの行列の絵のこのようです。手綱を持っている2番目の人が、さっきの女性たちの曾祖父だそうで。3人は従姉妹同士みたいですよ。

バスは外苑東通りを北に向かい、新目白通り右折してから、複雑な脇道を判断よく選んで進んだ。ふだんはタクシー乗務の運転手かもしれない。

途中、地下鉄丸ノ内線小石川車輛場の下を抜けるトンネルに入ったとき、車に不具合が生じたのではないかと思うほど徐行運転になった。ところがその緩さが、気持ちになじみ、ふんわりするような愉悦を誘い出した。このままずっと続いてもいいかもしれない、と。

そんな気分浸っているとき、出口から射し込む陽射しが逆光になり、最後列の私の席からは、全員の後ろ姿がシルエットとして黒く浮き立ち、幽鬼たちが座っているかのように見えた。

幽鬼の一人が口を開いた。

もうすぐ到着するのは、文京区小日向の江戸の切支丹屋敷跡です。異教徒弾圧の番所と牢獄があったところなんですが、ご存知ですか、シドッチという長崎から送られたイタリア人宣教師のことです。新井白石がこの神父を尋問して『西洋紀聞』を書きました。1畳ほどの牢屋に入れられ、獄死したと伝えられていました。長い年月がたって、2014年の発掘調査で遺骸が出てきたんですよ。それで……。

声は消えた。

車が暗闇を出て、切支丹坂を上り始めたとき、運転手と相談をしていたガイドの青年が客たちに告げた。すいません。この道は狭くてバスが長く停車できないそうです。申し訳ありませんが、車内から屋敷跡を見るだけになってしまいます。

すると、中年カップルが、自分たちだけここで降りしてほしいと言った。なぜか今度も他の客たちから不満は出なかった。ガイドは、折詰の弁当とペットボトルの緑茶を渡ししながら、ではお気をつけて、と挨拶した。2人は降りるとき、こう言い残した。2014年の屋敷跡の発掘調査ですが、

一緒に遺骸が見つかった日本人夫婦がいるんですよ。シドッチ神父のお世話係をしていた長助と春で、ひそかに神父様から洗礼を受けました。隠れ切支丹だったんです。では、皆さま、お元気で。

バスは飯田橋をへて、外堀通りを南に向かった。私は折詰弁当の海苔巻きといなり寿司を口に運んでいたが、トンネルの薄闇を通過したときの意識がほんのり翳むような状態が続いていた。大田区洗足池近くの辻で初老の男が下車し、バスはさらに入り組んだ脇道を抜けて世田谷区北鳥山の鴨池近くの辻に立ち寄って、祖母、娘、孫の家族が降りたときも、私は車内にとどまった。まるで眠りの奥で微かな光に感応するように、2組の客がそれぞれ小ぶりの花束を手にして去っていった光景が、遠くの方で明滅していたような気がする。

ツアーの参加者は私1人になった。ビルと街路樹の影が濃くなり、黄昏が近づいている。バスはスピードを上げる。どうやら甲州街道を西に向かっているらしい。どこへ向かっているのか判らない。希望する場所など伝えてないのに、どうしたことか。

不安が募りだすと、頭の芯からじんわりと意識の視界が澄んできた。バスは甲州街道を右折し、住宅街をしばらく進むと、高い鉄条網のフェンスの続く広々とした場所に出た。灰色の格納庫のそばにセスナ機が並んでいる、調布飛行場であることはすぐわかった。ガイドはゲートの係員に書類を渡し、バスは白い建物に直進し、横に回りこんで止まった。

「間に合ってよかったですね」とガイドの青年は安堵の笑みを浮かべた。「ドルニエ 228 という飛行機です。19人乗りですが、本日は11名の搭乗と聞いています。もう皆さん、お待ちですよ。手続きはいりません。乗る前に体重を測ることになっていますが、今日は人数が少ないので、問題ありません。では、ありがとうございます」

一気に説明が終わると、背後でバスのドアの閉まる音がした。夕闇の広がりにつかんで、尾翼にイルカのマークが入った青と白の機体があり。双発のプロペラが回転していた。誰が決めた予定かも判らないまま、というか拘るものが何もないさっぱりした気分で、私はタラップを上がった。

機内を見まわすと、押し黙った険しい表情の見知らぬ乗客に交じって、途中でバスを降りたはずの3人家族の祖母、初老の男、中年カップルの夫、美術館に行った3人の女性のうちマイクで説明役をした1人が後部座席のあたりに固まってこちらを見ていた。

私の席は一番前だった。いま、後ろから眺めれば、私自身の姿が黒いシルエットとなって、幽鬼の姿になっているかもしれない。背後からの人々の眼差しのなかに私自身の存在がある、とそんな取り留めない思いを楽しんでいると、ドルニエ 228 はどこか見果てぬ夢を追うように、虚空へ向かって上昇していった。

〈寸感〉

全体をかなり圧縮して記したが、いつもながら語り手の「私」の視点に寄り添いすぎた紹介文になったかもしれない。作中では、「私」に児島一平という名が与えられている。また、ツアーのガイド役の青年にも堀田という名前が付いているので、堀田青年と呼称したほうがよかったにちがいない。

末尾の「虚空へ向かって上昇していった」の次に斜線を入れて削除した1行がある。「窓から見えた地球が小さな点になり、やがてそれも消えたころ、私にようやく眠気が訪れた」というものだ。確かに、カットする判断が正しいように思う。

12 ミゼレーレ

(38 冊目, 3-4 ページ)

1 週間ぶりに「ブラック・ノート」を開いた。コーヒーの用意をしていると、不意に何かの記憶が甦ることがよくあるのだが、今朝もエスプレッソ用にグアテマラの豆を挽き、匂いが広がってきたとき、以前、終わり近くの「ノート」で目にした気がかりなタイトルの断章があったことを思い出した。全文を引用する。

「困ったもんだ、月曜日にまた台風が来るみたいだね」。

同年配の見知らぬ男が話しかけてきた。F 駅の改札口近く、待ち人があって、私は構内のコンビニの前で立っていた。

「困ったもんだ」と同意を求める口調に親しさをにじませ、男は顔にかかる白髪を手でかきあげた。「いや、まだわかりませんよ」

そうですね、と簡単に返せばよかったのかもしれない。男は向き直り、本格的な応答の態勢をとった。拒まれてきた言葉の来歴を思い返せば、鬱屈した気分が溢れ出すことくらい、私だって覚えがある。

「なにってんだ、台風、かならず来るよ。それですむと思うな。直下型の地震だって起こるし、わけのわからない感染症だってよ、また襲ってるんだ」

言いつのると、ますます過剰になっていく。これだって私にも覚えがある。

男は後ろ手に引いていた黒い買い物カートを、左手でゆっくり前にまわし、私との間に据えなおした。何者なのだろう。東ねたクリアファイルを大量に積んでいる。

「たしかに、そのうちいろいろなことが起こりますね」

私はこれで引き上げるつもりだった。しかし、男はなおも挑みかかってくる。

「違うだろう、台風も地震も疫病も、それに原発だってまだわからん、何もかもいっぺんに来るっていったんだよ」

私もほぼその意味で言ったつもりだった。しかし、やめておけばいいものを不意に言葉がこぼれた。

「そんなこと、誰にもわかりませんよ」

男の眉間に剣呑な線が浮かんだが、薄い唇は笑みをつくっている。私はこのちぐはぐな表情に、なぜか見惚れるような気分が動いた。その隙を突かれたのかもしれない。男の右肘が浮き、掌が何かを握っている形となった。

「あんな、中国と戦争になるぞ。北朝鮮や韓国ともな。アメリカなんか、当てにできないぜ」と男は、「いよいよ戦争だ」と語気を強め、右の掌に握った細い庖丁で、私の腹に向け 2 度 3 度と突き上げた。

見えない刃の冷たい感触が腹に残り、痛みが襲って来る覚悟をした。

「気をつけてくださいね」と私は大げさに腹を押さえる仕草で言った。こんな小さな労いで男は納得してしまったらしく、軽い会釈をして、買い物カートを引きずりながら立ち去った。

仕事の相談をするはずの待ち人はまだ来ない。携帯電話を取り出すと、未充電だった。数日前、電子メールで入った文面が思い浮かぶ。

——意表を衝くアングルの写真ですが、あまりに意外感に依存しすぎではありませんか。文章でもよくある例です。これをやりたかった、という作り手の欲望が露出し過ぎています。もっと

問題なのは、キャプションがあまりにも思わせぶりなことです。逆に、素朴な説明でありすぎたり、ちぐはぐなところも気になります。今後のこともありますから、1度お目にかかりましょう。

私は写真を差し替え、キャプションを書き直した原稿を携え、F 駅でまだ待ちつづけている。何事であれ、待てば待つほど、ちぐはぐな思いがつのるのは、今回だって同じだろうという意固地な思いが固まってくる。

台風地震、それと疫病と戦争も予言した男がまた近づいてきた。腹の刺し傷がまた疼きかける。ところが、今度は私に呼びかけたことなど忘れ、別世界を浮遊しているかのように、うつむき加減に私の前を素通りしていく。

買い物カートのクリアファイルの上に、フレンチ・ベーカリーの赤い袋が所在なさそうに置かれ、食パンが1斤、異物のように覗いている。

「困ったもんだ、月曜日にまた台風が来るみたいだね、地震だってわからないよ、それとパンデミックに原発に戦争も……」

こんどは私が男にそう話しかけるべきだったのかもしれないが、人ごみの中を駆け足で改札口に近づいてくる待ち人の姿が見えた。だが、人違いだった。ことによると急に日程が変わったのだろうか。それでも私はまだ待ち続けている。

〈寸感〉

「ミゼレーレ」というタイトルから思い浮かんだのは、17世紀のイタリアの作曲家グレゴリオ・アレグリの名高い祈りの合唱曲だ。「神よ、我を憐れみたまえ」と旧約聖書詩篇51篇をもとにしている。この掌編との直接的な関係は不明。ただ些細なことであるが、ひとつ気になるのは、このページにローマのレストランと思われるレシートが挟んであったことだ。Ristorante Su E Ciuとあり、2020.1.10.のローマ滞在の日付が入っている。アレグリの「ミゼレーレ」はバチカンのシスティーナ礼拝堂の朝3時の祈祷「暗闇の朝課」に使われるとすれば、このタイトルに何らかの思念を託しているとも考えられないこともないが、どうだろう。

2回目に届いた「ブラック・ノート」に入っている掌編であり、内容から言って明らかに笠間が海外から日本に帰ったパンデミック以後の話だ。放浪の日々を終え、静かに思索の日々を送っていたのだろうか。ならばどうして居所を知らせないのか、と当初の疑問に戻ってしまう。しかし、それは私にとってもはやどうでもいいという気分になっている。ましてやこの時期に再会など、面倒な思いが先に立つ。

[続く]

執筆者について――

中村邦生（なかむらくにお） 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説に、[『転落譚』](#)、[『チェーホフの夜』](#)、主な批評に、[『未完の小島信夫』](#)（共著）、[『『罪と罰』をどう読むか』](#)（共著）などがある。